

【高森町】 1人1台端末の利活用に係る計画

①1人1台端末を始めとするICT環境によって実現を目指す学びの姿

ICT機器を利用して「主体的・対話的で、深い学び」を実現するために

1 安定したネットワーク環境で個々の児童生徒がICT機器を活用する。

児童生徒、教師がクラウドアプリでつながり、情報の可視化・共有・協働作業を日常的に行う学校

2 個別最適な学び

児童生徒一人一人の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援する必要がある。そのために、学習履歴を活用して、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む学びを保証していく。これらの活動のためにICT機器を活用する。

3 協働的な学び

探究的な学習や体験活動等を通じて、一人一人の課題への取り組みを、グループや学級全体で可視化・共有しながら協働学習を進め、子ども同士や多様な他者とともに問題発見・解決を行うことで学びを深めていく。これらの活動のためにICT機器を活用する。

4 学習の振り返り

児童生徒一人一人が自らの学習状況を把握し、次時につなげる意欲や目的意識を育むとともに、教師が個々の学習成果を把握し学習状況を評価して次時の見通しを持つ。これらの活動のためにICT機器を活用する。

5 特別活動等、その他の活用

- ① 児童会や生徒会活動等でICT機器を活用して協働作業を行い、計画立案や周知、まとめや発表をリアルタイムで編集できる子どもたちを目指す。
- ② 教室外の場所や自宅などから、オンラインで授業参加することで学びの保障をする。
- ③ 個に応じた課題に取り組むことができるドリル学習で学びを補う。
- ④ タブレット端末を家庭に持ち帰り、児童生徒が学びたいと思う内容や教師から出された課題に取り組む、授業の予復習や知見を広げたり深めたりする。

・全国学力学習状況調査児童生徒質問紙からは、ICT機器の使用について週3回以上の割合は「南小(R6 72.9%)、北小(R6 100%)、高森中(R6 85.3%)」であり、R6年度は県平均や全国平均を上回っている。さらにICT機器が適切に活用されることを目指していく。

・町内両小学校R6では、「自分の考えや意見を分かりやすく伝えることができる」や「友達と協力しながら学習を進めることができる」などの項目で「1または2」と回答した児童の割合が県や全国の値を上回っている。

・中学校では、「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」について「1または2」と回答した生徒の割合がR6 87.2%と県や全国平均を上回っている。

・これら小中の回答データから、子どもたちが「学びの場で自分の考えを確かに持とうとしたり、友との協働作業を行うことがなされるようになってきている」ことが伺われる。学習履歴をもとに、個に応じた学びや協働作業が日常的に行われ、様々な資料をもとに工夫して発表を行える児童生徒を目指す。

②GIGA第1期の総括

1 成果

- ・クラウドアプリ(Google スプレッドシートやJamboard、ロイロノート等)の活用で、各自の考えを共有・比較し、自分の考えをより深めることができるようになってきた。
- ・全国学力学習状況調査児童生徒質問紙からは、ICT機器の使用について週3回以上の割合は「南小(R5 71.4%)、北小(R5 90.9%)、高森中(R5 46.1%)」であり、小学校は県平均や全国平均を上回

っているが中学校は下回っている。

- ・同様に両小学校 R6 では、「自分の考えや意見を分かりやすく伝えることができる」や「友達と協力しながら学習を進めることができる」などの項目で「1 または 2」と回答した児童の割合が県や全国の値を上回っている。
- ・中学校では、「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」について「1 または 2」と回答した生徒の割合が R5 73.9% と県や全国平均を下回っていた。
- ・小学校ではプレゼンテーションツールとして、中学校では事象のまとめや生徒会活動での意見集約などのツールとして、主体的な活用の姿が見られた。

2 実践内容

- ①一人1台の端末整備
- ②ネットワーク環境整備
- ③普通学級への電子黒板整備
- ④ Google Workspace for Education、ロイロノート、ライズ e ライブラリ、Viscuit、Sphero の導入、各種アプリについての研修
- ⑤教育支援指導主事 (ict 担当)、ict 支援員配置
- ⑥プログラミング教育年間計画の作成と授業支援
- ⑦町内各校委員による「ict 活用ワーキンググループ」設置
- ⑧飯伊地区研修会参加や町内研修会開催

3 課題

- ・GIGA I 期で整備された ICT 機器が活用されるようになってきているものの、日常的に使うことや対話的な学び、特に「表現」の工夫をしていくことは十分ではない。
- ・充電保管庫に熱がこもってしまい、タブレット端末のバッテリーが劣化した。タブレットの修理代金が全体の 10%程度に達した。
- ・Windows 機は、メンテナンスにかなりの労力がかかる。また、エラーでフリーズしてしまう機種も少なからず発生した。
- ・ネットワーク環境で業者設定だと AP が協調し合って電波の強弱を調整しているためか、接続が不安定になることがあった。

③1人1台端末の利活用方策

- ・一人一人の子どもたちが「自分の考えを持ち、友と情報交換しながら自分の考えを発表することで自信を深め、自分の考えを見直す」学びのスパイラルを確立するためには、児童生徒が個別に持つ ICT 端末を活用しつつ、ネットワーク環境下で協同的学びを積み重ねていく必要がある。これらの実践を通して、「主体的・対話的で深い学び」がなされ、学力が向上していくものと思われる。
- ・経年劣化を回避して次のような学びを保证するため、一人1台のタブレット端末の環境を維持することが必要である。

1 安定したネットワーク環境でこの児童生徒が ICT 機器を活用するために

- ・ネットワークアセスメントをもとに、より安定したネットワーク環境の構築をするとともに、毎学期、全教室で簡易アセスメントを実施していく。
- ・全ての学級で、クラウドアプリの日常的活用を推進し、授業における情報の可視化・共有・協働作業を日常的に行う。

2 個別最適な学び

個別に把握した児童生徒の学びの実態をもとに、個に応じた課題設定を行い配信したり、児童生徒の興味・関心や伸ばしたい力に応じた課題を追求できるよう、Google Classroom や Google アプリ、e ライブラリ等のクラウドアプリを活用する。

3 協働的な学び

Google スプレッドシートやドキュメントを共有設定して活用することで、グループや学級全体での協働作業を実現し、リアルタイムで学びの進捗を可視化・共有しながら課題解決に取り組むことができる。また、ICT 機器の活用を図りつつ、ペア学習やグループ学習を組み込んで話し合い活動を行うことで、子ども同士のつながりを深め、支え合える学級作りを目指す。このような学びを日常的に

全学級で実践するようにしていく。

4 学習の振り返り

開かれた学級作りを行い、児童生徒の自尊感情や自信を高めるためにも、様々な友や他の知見などを取り入れて主体的に取り組み、互いに情報共有する「一時間の学び」を積み重ねていくことが大事である。

Google Classroom や Google アプリ等を活用することで、児童生徒一人一人が自らの学習状況を把握し、次時につなげる意欲や目的意識を育み、グループや学級への所属感を高めるようにしていく。また、教師が個々の学習成果を把握し学習状況を評価して次時の見通しを持つようにする。さらに、学習内容の定着ならびに児童生徒個々に応じた問題に取り組める AI 型ドリル教材で、学力の定着や学習内容の予習に活用する。

5 特別活動等、その他の活用

- ① 児童会や生徒会活動等で ICT 機器を活用して協働作業を行い、計画立案や周知、まとめや発表をリアルタイムで編集できる子どもたちを目指す。
- ② 教室に入れない子どもたちや長期欠席、出席停止の子どもたちの学びの保障をするため、遠隔授業配信で授業参加できるようにする。
- ③ タブレット端末を家庭に持ち帰り、Google Classroom や AI ドリルを活用し、児童生徒が学びたいと思う内容や教師から出された課題に取り組み、授業の予復習や知見を広げたり深めたりする。

6 プログラミング教育

- ・小1～2年時：タブレットで、ロボット等を操作することを通して ICT 学習に興味関心を持つとともに「プログラミング教育」の基礎を育む。
- ・小3年時：ローマ字学習と並行して「正しい指使い」に配慮したタイピング学習を行う。
- ・小4～小5年時：Scratch を用いて、論理的思考を学ぶ。
- ・小5～小6年時：マルチメディアツールを用いてプレゼンテーションする力を育む。
- ・中学校：micro:bit を用いて、論理的思考を学ぶ。

◆以上の内容を実施していくために

- (1) 各校委員参加による「高森町 ICT 活用ワーキンググループ」で、高森町として ICT 機器活用や授業作りの方向性を各校で共通理解して推進していく。
- (2) 全ての学級で ICT 機器を活用した学びを実践するため、次の研修を実施する。
 - ・学校全職員を対象とするツール理解ならびに操作できるようにするための研修
 - ・管理職を対象とする校内リーダーシップ実践研修
 - ・教職員のニーズに応じたスキルアップ研修
 - ・先生方の困り感に即応できる支援を行う。
- (3) 教職員の業務軽減のため、校務支援システムを導入する。児童生徒の出欠情報や各種名簿を校務支援システムに関連付けたシステムを構築してデジタル DX を一層推進する。
- (4) 充電保管庫に空冷ファンを取り付けて排熱するようにする。また、タブレット端末の自宅持ち帰り & 自宅充電ができるようにしていき、充電保管庫を予備充電器として活用していく。
- (5) 学びで使うアプリはクラウド活用のため、動作が軽く、安定して動く chromebook を導入する方向で考える。